A Room with a View に於けるBaedekerの象徴的解釈について

南　井　正　廣

I

E. M. Forster の第3作 *A Room with a View* は，その女主人公 Lucy Honeychurch の成長の物語である. Lucy はイタリア旅行の際に, 美・情熱・暴力を包括する新しい価値観に基づく生き方をかいま見るが、ヴィクトリア朝時代の道徳律や因習に束縛されて，鉄道会社に勤務する奔放な若者への愛を抑え，偽善者的・没個性的な生き方を選ぼうとする．しかし，Forster の代弁者とでも呼ぶべき Mr Emerson の衝撃的な発言によって覚醒し，"the holiness of direct desire"[1] を学び，幸福な結婚をするという筋立てである．

Lucy の成長は，読者が作品中に見出すことのできる，いくつかの対照的なイメージ乃至は対立する象徴を背景に展開される．例えば，Wilfred Stone は Forster が *Aspects of the Novel* で言及している「小説のリズム」を織りなすものとして，"medieval vs. classical"・"ascetic vs. pagan"・"Gothic vs. Greek" さらには "truth vs. lies"・"light vs. darkness"・"view vs. room" のような対立する象徴を取り上げている[2]．しかし，これらの象徴は――どれも妥当な指摘であるが――あまりにも多種多様であるので，Lucy の成長に関する一貫した視座を構築するのを困難にしている．そこで本稿では，これまで象徴として取り上げられることのなかった Baedeker という旅行案内書に焦点を当てて，*A Room with a View* の基本的な構図である "the foggy world of genteel propriety" と "the clear world of reason, spontaneity, and naturalness"[3] という2つの世界の間で，揺れ動く Lucy の

成長過程を辿ってゆきたい.

II

Baedeker とは，Karl Baedeker(1801–59) が創立したドイツの出版社の名称で，旅行者がガイドを雇うことなく旅行できるという目的で発刊されていた、有名な Baedeker's Guide Books の版元のことである. Baedeker には，対象となっている地域を旅行する際に必要な経費から言語，パスポート，知っておくべき風俗習慣，交通機関はもとより，モデルプラン，さらには信頼できるホテルやペンションの名前といった実用的な情報まで記載されている. また Baedeker の注目すべき特徴として星印の使用が挙げられる[4]. これは，特に信頼のおけるホテルや特に関心を払うに値する名所旧蹟を示すのに用いられているもので，重要度に応じて星印が 1 個の場合と 2 個の場合がある. Forster 自身が *Alexandria : A History and Guide* の序文で "I have always respected guidebooks—particularly the earlier Baedekers and Murrays. . . ."[5] と Baedeker 評をしているほどであるから，その信頼度はかなりのものであったと言える。

A Room with a View の登場人物達も，イタリア旅行に際して Baedeker を購入している. 女主人公の Lucy，その付添い婦人である Miss Bartlett，さらに彼女らがペンションで泊まり合わせた Alan 姉妹も携帯していた. 彼女らにとって Baedeker は、名所旧蹟の見学あるいは有名な美術品の鑑賞の際に，有効な見学方法や重要度を教えてくれる貴重な本——俗物的な知識欲を満たしてくれる格好の書なのである。フローレンスでの第 1 夜，自室で Baedeker's *Handbook to Northern Italy* を開いて，フローレンス史の重要な年月日を記憶する Lucy の姿には，ヴィクトリア朝時代の女性の旅行心得が示されている. この時点での Lucy の芸術鑑賞法は，自分の眼による直観的なものではなく，ガイドブックに記された知識の再確認にすぎない. 自分なりの鑑賞法より，人に笑われない鑑賞法に比重が置かれているのである.

A Room with a View の中での Baedeker の影響力は，観光地の見学や芸術鑑賞以外の分野にまで波及している．つまり，Baedeker を所有し，それによって知的好奇心を満たしている人物には，自分の価値判断に依拠する芸術鑑賞力がないだけでなく，人間の行動様式を権威――社会規範にとらわれぬ眼で見つめる能力もないのである．例えば，Miss Bartlett は "Victorian code of morals" という当時の道徳観の忠実な実践家である．ペンションでは，宿泊客はお互いの様子が知れるまで観察をしてから話をすべきだということ，若い女性は見ず知らずの人の恩義をこうむるべきでないこと，人前で "bath" や "stomach" といった下品な言葉は使ってはならないことなどが，彼女の意識から片時も離れない．彼女は社会規範の実践に専心するあまり，自分の属する社会の道徳観にとらわれないで，外界の事象（人間や人間の行動をも含める）を判断することができない．自分と Lucy との会話に，突然入り込んできて部屋の交換を提案した Mr Emerson を，彼女は即座に "ill-bred" な "Socialist" だと決めつけている．（彼女と行動様式を異にする Mr Beebe が，思っていることを卒直に口にする点を Mr Emerson の長所だと弁護しているのと対照的．）しかし，Miss Bartlett の信奉する "Victorian code of morals" は，他人の冷笑を避けて人生航路を進むための知恵であるとも言える．Frederick C. Crews は *A Room with a View* で述べられている教訓は，「エチケットブックを捨てて自分の心の声に耳を傾けることだ」と主張している[6]．このエチケットブックとは Lucy が "Victorian Lady" として恥ずかしくない生き方をするのに必要な知恵の集大成――「人生の Baedeker」と言えるのではないか．

「人生の Baedeker」は，"Victorian code of morals" に限定されるものではない．牧師には牧師にふさわしい行動様式を導き出す知恵がある．また，Cecil Vyse のように，書物や音楽や美術に関する知識のみに埋もれていて，その知識のみを基準にして人間や人生を判断している人物もいる．彼らの価値観を支配する知恵や知識も，人間如何に生きるべきかを教示してくれる「人

生の Baedeker」に他ならない.

しかし,権威ある定見のみに拘泥した芸術鑑賞をすることによって,かえって作品本来の価値を見失ってしまうのと同様，何らかの道徳律や知識に固執して人生を眺めることに終始すると人生を見誤ることになってしまう. Lucy の成長とは，一切の権威ある知識から解放されて，芸術作品を，人間を，人生を，自分の視点から眺める力を養うこと――象徴としての Baedeker からの解放を意味する．従って，以下の章で Baedeker からの解放という観点から見た Lucy の成長過程を論じてゆくことにする.

Ⅲ

Lucy は思いやりがあり，純真かつ好感の持てる人物として描かれているが，精神的に脆弱であるために，自分の本能や欲望よりも自分の所属階級に内在する因習的な考え方に左右されている[7]．Mr Beebe が見事に表現しているように，小説が始まる時点での Lucy は，Miss Bartlett に糸を持たれた凧のような存在で，自分の意志を堂々と反映させる場がないように思われる.

実際 Lucy が自信を持って自己を表現している場は，ピアノ演奏しかない. イタリア旅行をする前に，タンブリッジ・ウェルズで催された演芸会で Lucy が Beethoven のピアノソナタ32番 (Opus 111) を弾いている場面が，Mr Beebe の回想として描かれている．その曲の第1楽章は，荘厳で厳粛であるのを特徴とするが，Lucy は勝者の如く情熱的に演奏している. Frederick C. Crews によれば，Lucy のピアノ演奏はその技量よりむしろ情熱や勝利感の表現手段であり，自己実現の場である[8]．そして，Lucy にはロマンティックな性向が備わっていて[9]，それがピアノ演奏に投影されているのである.

Lucy にとって問題となるのは，情熱的で意気揚々とした性向がピアノの世界だけに留まり，実際の彼女の生き方には全く活かされていないことであ

る．Lucy の演奏に関して，Mr Beebe は "If Miss Honeychurch ever takes to live as she plays, it will be very exciting——both for us and for her" (p. 31) と示唆に富む発言をしている．この言葉の中に，Lucy の成長の可能性が示されている．即ち，どんな知識や社会の掟にも惑わされることなく，自分の眼で外界の事象を観察し，自分の価値判断で，ピアノに託された情熱を実人生に反映させることを，Lucy は学ばなければならないのである．

フローレンスでの第1日目は，失望と不満のうちに始まる．ペンションの女主人が，見晴らしのある部屋 (a room with a view) を提供するという約束を守らなかったからである．ここで言う見晴らし (a view) が，部屋からのすばらしい眺めを指すのは言うまでもないが，もっと象徴的に自然や人生に対して開かれた心の窓と考えると，登場人物の心理に合致する．見晴らしのない部屋を与えられたのは，自分の属する社会の因習に縛られている Miss Bartlett と，無力にも彼女に追随させられて，"spiritual starvation" (p. 5) の状態に陥っている Lucy なのであるから．それ故，Mr Emerson によって提案された部屋の交換は，Lucy にとっての転機を暗示する．つまり，この交換には，Lucy が Mr Emerson から自分の眼でものを見る場——外界の事物に対して自分なりの価値判断をする場を与えられたという象徴的な意味が潜在するのである．

フローレンスで Lucy は3つの事件とかかわり，対立する価値観を見せられる．第1番目は，Santa Croce 寺院への散策の際に生じる．同行した女流作家 Miss Lavish の無責任な行動のために，Lucy はBaedeker を持ち去られて寺院の前にひとり取り残される．Baedeker のない Lucy には，Giotto のフレスコ画の鑑賞法が解らない．そのとき，Emerson 父子と Mr Eager という牧師の率いる一行が，Lucy の前に現われ，Giotto の「聖ヨハネ昇天」[10]に関しての2通りの鑑賞法が提示される．Mr Eager は，Baedeker と祈とう書を携えた会衆に向かって，美術作品としての価値によってでなく，魂の基準によって Giotto を崇める方法を威厳をもって説いている．これに

対し，Mr Emerson は，"as for the frescoes, I see no truth in them. Look at that fat man in blue! He must weigh as much as I do, and he is shooting into the sky like an air-balloon" (p. 23) と述べている．さらに，彼の息子 George も父のあとを受けて，直観的な評価を下す．

> "It happened like this, if it happened at all. I would rather go up to heaven by myself than be pushed by cherubs; and if I got there I should like my friends to lean out of it, just as they do here. . . . Some of the people can only see the empty grave, not the saint, whoever he is, going up. It did happen like that, if it happened at all." (p. 23)

Giotto のフレスコ画を，宗教というガラスを通して会衆に見せようとする Mr Eager と，他人からのお仕着せでなく自分の眼で鑑賞している Emerson 父子とは，全く対照的である．Lucy は，ここでは Emerson 父子に触発されて，Giotto のフレスコ画（Baedeker で２つ星印が付けてある）より，Santa Croce へ来る前に Annunziata 広場で見た Della Robbia babies[11]（星印が１つしかない）の方が気に入ったと言っている．少し解放的な気分になっている Lucy に，Mr Emerson は次のような暗示めいた言葉を投げかける．

> "But let yourself go. You are inclined to get muddled, if I may judge from last night. Let yourself go. Pull out from the depths those thoughts that you do not understand, and spread them out in the sunlight and know the meaning of them. By understanding George you may learn to understand yourself. It will be good for both of you." (p. 26)

部屋の交換に際して，自分の意見も言えず，Miss Bartlett の言うがままになっていた Lucy を，Mr Emerson は "get muddled"[12]だと指摘しているのだが，Lucy にはまだ理解できない．George の理解云々に至っては，全く

途方もないことなので，Lucy には何も答えられない．この発言には，Lucy の現況とこれからの指針が示されているので，Lucy の成長を理解するためのキー・センテンスとして重要である．

このように Santa Croce で，Lucy は Baedeker から離れた美術鑑賞の可能性を提示され，自らも無意識的にそれをやってのけてはいるが，寺院に Miss Bartlett が現われると，急に元気がなくなり，親しく喋り続けてきた Mr Emerson に話しかけるのもやめてしまう．"Poor girl" (p. 27) という Mr Emerson の嘆きを振り切って，Lucy はMiss Bartlett に合流し，因習に縛られた世界に戻ってしまう．

第 2 の事件は，Lucy の眼前で勃発した殺人事件である．気絶した Lucy は，偶然その場に居合わせた George に抱きとめられる．このとき，Lucy が購入したばかりの Alinari 版の美術写真にも血糊が付着していて，George は恐怖心にかられて写真を Arno 河へ投げ捨ててしまう．

この殺人事件に関して，Giotto を宗教的に鑑賞した Mr Eager は，"This very square. . . witnessed yesterday the most sordid of tragedies. To one who loves the Florence of Dante and Savonarola there is something portentous in such desecration—portentous and humiliating" (p. 50) という印象を語っている．彼にとってのフローレンスは，美術館であって生きる場所でない[13]．確かに，Dante や Savonarola が活躍した都市としてのフローレンスは Baedeker にも記載されている．しかし，権威ある旅行案内書にも記載されてない「人間が生きかつ死ぬ場」としてのフローレンスも存在するはずである．殺人事件の際に，Lucy の前に現れたフローレンスは，Baedeker の案内から離れた現実の姿なのである．

このような観点から殺人事件を眺めなおすと，血糊の付着した美術写真にも別の意味が重なってくる．その写真は，生や死という現実の前では芸術が無力であることを表しているのである．従って，Lucy は Baedeker で星印の付いている絵画ではなく，実人生の現実をありのままに受け入れることを

学ばねばならない．また，写真に付着した血（Lucy が血を浴びたことになる）は，Lucyが他人の庇護を受けてきた従来の世界から，現実の領域へと一歩踏み込む "initiation" の儀式を，読者に連想させるものである[14].

George にとっても，殺人事件は「1人の人間の死」以上のものであった．彼は気絶した Lucy を抱きとめたことで「生の実感」を得ると共に，血の付いた写真を，死へのそして現実への恐怖心から捨てることで，「生への執着」・「生への願望」に目覚め，世紀末的悲観論から解放される．他方 Lucy は，現実の領域への "initiation" を，まだ意識のレベルで捉えることができない．彼女は自分が気絶して George に助けられたことが，ペンションのゴシップにならぬように，George の口止めをするに留まる．

第3の事件は，Fiesole へのピクニックで起きた衝撃的なものである．Fiesole へ行く途中，御者の Phaeton が恋人を馬車に乗せ，客の眼を盗んでキスをするのを見られてしまうことが，この事件の前景となる．ここで，恋をめぐって2つの価値観が衝突する．Mr Eager は，恋人を妹だと偽って馬車に乗せた御者を，嘘つきだと責めたて，2人を引き離そうとする．一方，Mr Emerson は恋人達を擁護する．

> "Do we find happiness so often that we should turn it off the box when it happens to sit there? To be driven by lovers—a king might envy us, and if we part them it's more like sacrilege than anything I know." (p. 62)

Mr Eager にとっては，仕事中に人前でキスをすることが神聖冒瀆であり，逆に Mr Emerson にとっては，幸わせなカップルを引き離し，恋をぶち壊すことこそが神聖冒瀆なのである．結局，御者の恋人を馬車から降ろすという Mr Eager の勝利のうちに，事態の収拾がつけられる．恋人達から助けを乞われても何もしない Lucy であったが，今度は彼女自身が後に2つの価値の選択を迫まられることになる事件に巻き込まれる．

Fiesole で各自がそれぞれの散策を楽しんでいる時に，Lucy は御者の言葉の取りちがえで，隅々まですみれの花で覆われ，光と美に包まれた台地で，George と出会う．その情景は，次のように見事に表現されている．

> From her feet the ground sloped sharply into the view, and violets ran down in rivulets and streams and cataracts, irrigating the hillside with blue, eddying round the tree stems, collecting into pools in the hollows, covering the grass with spots of azure foam. But never again were they in such profusion; this terrace was the well-head, the primal source whence beauty gushed out to water the earth. (pp. 67–68)

この美しい舞台で，Lucy はGeorge にキスされる．Baedeker にも記載されてない，名もない美しい場所で，Lucy はキスという彼女がそれまで学んできた「人生の Baedeker」にない体験をしたのである．殺人事件も現実なら，男女間のキスもまた現実である．このキスに感化されて，Lucy が人生の赤裸裸な現実を受け入れ，ピアノ演奏の中でしか表出できない情熱の用い方（実人生での自己表現の方法）を学ぶことが待たれるのであるが，Miss Bartlett がキスを目撃していて，Lucy を "a cheerless, loveless world" 乃至は "a shamefaced world of precautions and barriers" (p. 78) へ連れ戻してしまう．Lucy は，自分のことを自分で処理できないことに不満を抱きながらも，ゴシップを避けるためのローマ行を承諾してしまう．

以上イタリアで起きた3つの事件を総括すると，Lucy は Baedeker にない世の中の現実を提示されているものの，意識のレベルでそれらを捉えきれないで，因習に縛られたままである．しかしながら，George の姿がイタリアでの体験と共に，帰国後も "ghost" や "nerve" の形で Lucy の心に忍び寄って来ることからも解るように，Lucy は潜在意識のレベルでは，かなり影響を受けていると言える．

Ⅳ

第2部の舞台は，イギリスのサリー州である．Lucy の婚約者として，Cecil Vyse が登場する．彼は，Lucy の弟 Freddy によれば，他人にその人なりの流儀でなく自分の流儀で話をさせる人間であり，作品の中では "a Gothic statue" や "those fastidious saints who guard the portals of a French cathedral" (p. 86) といった中世的イメージに似た人物として描かれている．この中世的外観には，禁欲主義という中世的行動規範が伴う．彼は十分な知識や教養を備えながらも，自らは傍観者としての態度を貫く修道士のような存在である．従って，彼は書物・音楽・美術品に埋もれ，そこから得た知識を通して人間や人生を眺めようとする．このことは，Cecil が Lucy のどのような点に魅せられていたかを知れば一目瞭然である．

> Italy worked some marvel in her. It gave her light,——which he [Cecil] held more precious——it gave her shadow. Soon he detected in her a wonderful reticence. She was like a woman of Leonardo da Vinci's, whom we love not so much for herself as for the things that she will not tell us. (p. 88)

Alan Wilde の言葉を借りれば，彼は芸術というぼんやりした靄を介して Lucy を見ていたのである[15]. Cecil にとって Lucy は1個の芸術作品 "a treasure to be protected"[16]であって，自分の考えを持つ自律的人間であってはならぬのである．彼は知識や教養という権威を背景に，Lucy 独自の直観力や判断力を支配しようとする Baedeker 的影響力の権化である．Lucy が彼を「眺めのない部屋」というイメージに結び付けているのは，彼女の Cecil に対する漠然とした不安の表れである．何故ならば，Cecil には Lucy を所有するという意識しかなく[17]，彼は Lucy が自分の眼でものを見て価値判断を下す機会を奪おうとしているのであるから．

Cecil が Cissie ヴィラに Emerson 父子を住まわせたことによって，Cecil と好対照をなす George が再び登場する．George は Lucy の突然のローマ行で気落ちし，再びメランコリアに罹っていたが，Freddy との水浴びで生きる力を回復し，"the shout of the morning star" (p. 134) と共に現れる．Cecil と George の行動様式は，テニスに対する 2 人の態度に集約される．積極的にテニスに参加し，たとえ Lucy が相手であっても，勝利を追求していく George の態度からは，人生の現実を直視しそれに立ち向かっていく，生きたいという願望が感じられる．これに対し，人前では絶対にテニスをせず，小説を読み耽る Cecil の態度からは，彼が常に傍観者的立場を固守し，実人生に体当りして生きていく意志を持たないことが読みとれる．

George は，Cecil の眼を盗んで Lucy に 2 度目のキスをする．彼は，キスによって Lucy にイタリアでの体験を思い出させ，Lucy を自分の眼で人生を眺める世界へ連れ戻そうとする．Lucy に向かって，George の恋愛観ならびに Lucy への愛が告白される．

> "I'm the same kind of brute at bottom. This desire to govern a woman ——it lies very deep, and men and women must fight it together before they shall enter the Garden. But I do love you in a better way than he [Cecil] does. . . . I want you to have your own thoughts even when I hold you in my arms." (pp. 166–167)

George の恋愛観は非常に進歩的であり，彼の愛は真摯なものであったが，Cecil と婚約中という社会的体面（「人生の Baedeker」）が，Lucy に George の愛を受け入れなくさせる．しかし，去り際に George が残した Cecil 観は，Lucy に多大なる影響を与える．

> "He [Cecil] is the sort who are all right so long as they keep to things ——books, pictures——but kill when they come to people. . . . Every

> moment of his life he's forming you, telling you what's charming or amusing or ladylike, telling you what a man thinks womanly; and you, you of all women, listen to his voice instead of to your own. (p. 166)

George は，Cecil が Lucy の眼を曇らせている Baedeker 的存在であると主張している．この新しい Cecil 観こそが，Lucy の Cecil との婚約破棄の根本的要因となる．Cecil から婚約破棄の理由を尋ねられた Lucy は，

> "conventional, Cecil, you're that, for you may understand beautiful things, but you don't know how to use them; and you wrap yourself up in art and books and music, and would try to wrap up me. I won't be stifled, not by the most glorious music, for people are more glorious, and you hide them from me. That's why I break off my engagement. You were all right as long as you kept to things, but when you came to people——" (p. 172)

と，彼の生き方を酷評している．このとき，Lucy は "a different person: new thoughts——even a new voice" (p. 172) として，Cecil の前に現れているのである．Cecil は，「真の自分の姿」や「女性の本質」を自分に教えてくれたことを感謝して，Lucy と別れる．

Forster は，"Notes on the English Character" の中で，パブリックスクール出身者について，"They go forth into it [the world] with well-developed bodies, fairly developed minds, and undeveloped hearts"[18] と述べているが，これが Cecil にもあてはまる．知識はあるので物には対応できるが，心が未発達なので生身の人間——世の中の現実の前では，無力である．彼は自分の狼狽を隠すために，尚一層知識や教養に縋ろうとする．この行動様式を George に，そして Lucy に見抜かれたのである．

Lucy は，イタリアからの帰国以来，度々 "ghost" や "nerve" に悩まされ

てきた．これは，George がイタリアでの思い出と共に Lucy の心に侵入してきたもので，ナレーターも指摘している (p. 142) ように，Lucy の George への愛の証左に他ならない．にもかかわらず，Lucy はGeorge への愛に走ろうとはしない．Cecil という Baedeker 的影響力を持つ人物から解放された後とはいえ，社会的体面——世間体という「人生の Baedeker」が，婚約解消後 Lucy が別の恋人を愛することを許さないのである．Lucy は本来の自己を偽わる．情熱や心の真実を抑えて，George には彼のことを愛してないふりをし，Cecil には誰をも愛してないふりをする．この時の Lucy の心境は，以下の通りである．

> It did not do to think, nor, for the matter of that, to feel. She [Lucy] gave up trying to understand herself, and joined the vast armies of the benighted, who follow neither the heart nor the brain, and march to their destiny by catchwords. The armies are full of pleasant and pious folk. But they have yielded to the only enemy that matters——the enemy within. They have sinned against passion and truth, and vain will be their strife after virtue. As the years pass, they are censured. Their pleasantry and their piety show cracks, their wit becomes cynicism, their unselfishness hypocrisy; they feel and produce discomfort wherever they go. They have sinned against Eros and against Pallas Athene, and not by any heavenly intervention, but by the ordinary course of nature, those allied deities will be avenged. (p. 174)

Lucy は，もはや自分を理解しようとはせず，自分で考えたり感じたりすることもない．合言葉即ちヴィクトリア朝時代の社会の掟，道徳観に自分の運命を委ねる無知蒙昧の大群——「人生の Baedeker」に隷属する民衆に加わった．Lucy は，没個性的で社会規範に従順な女性として，30年前に Miss Bartlett が辿ったのと同じ道を進もうとする．このことは，George への愛

を認めず自己欺瞞に陥っている Lucy の仕草，言葉遣い，表情が，Miss Bartlett のそれと似てきたという Lucy の母の指摘からも推定されうる[19].

やがて，Lucy の自己欺瞞は自己逃避に変貌する．Lucy は Alan 姉妹のギリシャ旅行に同行することで，愛や現実からの逃避を図ろうとする．Alan 姉妹は，旅行だけでなく彼女らと同じ境遇（独身主義）へと Lucy を手招きしている[20]．Lucy が未婚であることを望んで，ギリシャ行を支持するという点では，Miss Bartlett や中世的禁欲主義を隠蔽していた Mr Beebe も同罪である．彼らの力添えで，Lucy のギリシャ旅行が決定する．ギリシャ旅行を前に，Lucy がBaedeker を購入し，事典でギリシャの神々の名前を調べることが大切だと言っていることからも，彼女が今だに権威に縛られ自己の直観力や価値判断力を信頼していないことが伺い知れる．

Lucy を危機的状況から救出するのは，Mr Emerson である．彼は先ず，Lucy が "muddle"（社会的因習によって心が致命的に曇らされている状態）に陥っていることから説き始める．さらに，人は生きている間に愛の効用を学ぶべきだと主張し，Lucy に心の真実を見つめるようにと促す．そして，Lucy が Cecil との婚約を破棄したことを知ると，それは Lucy が George を愛していることに起因すると確信し，大胆な発言をして Lucy にショックを与える[21]．

> "Then be his [Geroge's] wife. He is already part of you. Though you fly to Greece, and never see him again, or forget his very name, George will work in your thoughts till you die. It isn't possible to love and to part. You will wish that it was. You can transmute love, ignore it, muddle it, but you can never pull it out of you." (p. 202)

自分の魂の奥まで見つめることを強要され，Lucy は初めて George への愛を意識するに至る．しかし同時に，その真実の愛を遂行すれば，Cecil との婚約解消に理解を示し，独身主義を貫くためのギリシャ旅行を支持してくれ

た人達の信頼を裏切ることにもなりかねない．Mr Emerson は，"we fight for more than Love or Pleasure: there is Truth. Truth counts, Truth does count" (p. 204) という言葉で世間からの非難を恐れる Lucy を元気づける．真実こそが大切であり，何よりも尊いのである．人は心の真実を直視していかねばならぬのである．かくして，Lucy は "the holiness of direct desire" を教えられ，駆落ちという形ではあるが George と結ばれる．Lucy の眼は，心の真実に，愛に，そして人生に向かって開かれたのである．

Lucy は外界の事物を，人間を，世の中の現実を，ある種の権威 (Baedeker) に頼ることなく自分の眼で見つめ，自分で価値判断の下せる状態になれたのである．勝利に満ち溢れたピアノ演奏にしか反映されなかった情熱が，実人生に於いても発揮されるに至ったのである．

V

最後に，*A Room with a View* に見られる様々な対立するイメージを，Baedeker を象徴的に解釈する立場から言及して本稿を終わりたい．先ず，"medieval vs. classical" であるが，Cecil や Mr Eager のように，人生を権威としての知識を通して眺め，傍観者的な態度を貫く人物は，中世的イメージで描かれているか，又は中世趣味を持つ人間として描かれている．読者の予想に反して，Lucy と George の結婚に "lamentable, lamentable——incredible" (p. 203) という感想を洩らす Mr Beebe は，実は中世的禁欲主義の信奉者である．さらに，Miss Bartlett の行動規範になっている女性観も中世以来の伝統的なものである．これに対し，"classical" のイメージは，Alan Wilde が "the Renaissance" と言い換えていることからも解るように[22]，一切の権威から解放された人間性への謳歌に連なり，作品中では恋や情熱を尊ぶ Mr Emerson や恋情に逸って強引なキスをした自然児 George の基調となる．

"ascetic vs. pagan" も "medieval vs. classical" からの派生物で「中世的禁

欲主義（独身主義）者と Eros（愛の神）や Pallas Athene（芸術の神）を称揚する人の対立」と考えられる．中世志向の Cecil は "gothic" 式の厳しい聖人像のイメージで描かれ，自然児（洗礼も受けてない）George はルネサンス芸術の粋と言うべき，Michelangelo の表現した筋骨隆隆たる肉体の持主であり，読者にギリシャの彫刻を連想させる．

"truth vs. lies" や "light vs. darkness" に関しては，権威的な知識や行動規範に捕われない Emerson 父子は，真実を重視し，常に真実を語る．そして彼らには，日の当たるイメージ "light" が付随する．他方，社会的に承認されうる行動しかできない Miss Bartlett は，自分をも他人をも偽る人であり，"fog"・"thick curtain"・"closed spaces"・"dense air"[23]のイメージを想起させる．また，"darkness" は，Lucy が自己欺瞞に陥っているか否かを知る尺度となるイメージで，Lucy が George への愛を抑えギリシャ旅行の準備をする際に，しばしば現れている．"darkness" はさらに，作品中の季節描写でも用いられている．Lucy が自分を偽るのと一致するかのように，季節が夏から秋へと移行し，暗さが強調される．

"view vs. room" という対立にも，登場人物が対応する．"a room with a view" とは部屋に眺めがあり，自分の視覚で外界を捉え価値判断が下せる場である．小説が始まる時点で，"view" のある部屋を占有していた Emerson 父子には，この場を活用できる行動様式が備わっている．反対に，"a room with a view" を与えられなかった Lucy や Miss Bartlett は，Baedeker や「人生の Baedeker」の束縛を受けている状況にある．Lucy に芸術作品（レオナルド・ダ・ヴィンチの女性）としての生き方を強要した Cecil が，"a room without a view" のイメージと結び付けられているのも理解できる．

以上のように，作品中のイメージを検討していくと，Baedeker や「人生の Baedeker」といった権威主義，社会規範に束縛されている人物は，"medieval"・"ascetic"・"gothic"・"lies"・"darkness"・"room" のイメージに符合し，Baedeker に拘泥しない人物は，"classical"・"pagan"・"Greek"・

"truth"・"light"・"view" といったイメージにつながっていくことが判明するであろう.

注

1 E. M. Forster, *A Room with a View* ("Abinger Edition of E. M. Forster"; London: Edward Arnold, 1977), p. 204. 以下この作品からの引用は, その直後の括弧内にページ数のみを記す.

2 Wilfred Stone は *The Cave and the Mountain: A Study of E. M. Forster* の中で次のように述べている.

"Medieval versus classical, ascetic versus pagan, and Gothic versus Greek—these are some of the important sets of contrasts that create the 'rhythm' of the novel. Along with truth versus lies, light versus darkness, and view versus rooms, these are the symbolic antitheses that make up the book's tapestry of interwoven themes." (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1966, p. 226)

3 John Colmer, *E. M. Forster: The Personal Voice* (London: Routledge & Kegan Paul, 1975), p. 44.

4 "Baedeker" については *Encyclopaedia Britannica* に以下のように記載されている.

"His [Karl Baedeker's] aim was to give the traveler the practical information necessary to enable him to dispense with paid guides. He checked the reliability of his publications by incognito journeys and consulted the best sources and experts. A notable feature of his guides was the use of 'stars' to indicate objects and views of special interest, as well as reliable hotels." (Chicago: William Benton, 1969, Vol. II)

5 E. M. Forster, *Alexandria: A History and a Guide* (Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1968), p. xv.

6 Frederick C. Crews, *E. M. Forster: The Perils of Humanism* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1962), p. 88.

7 John Sayre Martin, *E. M. Forster: The Endless Journey* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976), p. 90.

8 Frederick C. Crews は Lucy のピアノ演奏に関して下記のように述べている.

"Lucy's playing of Beethoven sonatas, expressing passion and 'victory' rather than technical skill, becomes equated with her self-fulfillment." (*E. M. Forster: The Perils of Humanism*, p. 89)

9 J. B. Beer, *The Achievement of E. M. Forster* (London: Chatto & Windus, 1962), p. 53.

10 Karl Baedeker の *Northern Italy: Handbook for Travelers* では，Santa Croce 寺院の Giotto のフレスコ画や「聖ヨハネ昇天」の絵が，次のように紹介されている．
"We now come to the chapels of the Peruzzi and the Bardi families, containing Giotto's principal paintings, the work of his ripest years, full of intellectual life and unadulterated truthfulness, and wholly free from superfluity or exaggeration. These fine works were discovered by G. Bianch in 1853 and have been extensively restored. In the CAPPELLA PERUZZI Giotto has portrayed the life of the two St. Johns. . . ." (Leipzig: Karl Baedeker, 1906, p. 598)

11 Della Robbia babies は Baedeker で，"The medallions with charming Infants in swadding clothes, between the arches, are by Andrea della Robbia" (p. 602) と説明されている．

12 "muddle" に関しては様々な解釈があるが，本稿では John Colmer の定義を採用しておく．
"It [*A Room with a View*] celebrates the victory of Love and Truth over 'Muddle', a word of rich and varied connotation in Forster's fiction that normally signifies some fatal obscuring of inner vision by the falsifying conventions of society." (p. 43)

13 Wilfred Stone, p. 223.

14 John Colmer, p. 46.

15 Alan Wilde, *Art and Order: A Study of E. M. Forster* (New York: New York University Press, 1964), p. 53.

16 John Sayre Martin, p. 98.

17 Alan Wilde, p. 54.

18 E. M. Forster, "Notes on the English Character" in *Abinger Harvest* (London: Edward Arnold, 1953), p. 13.

19 John Sayre Martin は，Lucy と Miss Bartlett の共通性について次のように述べている．
"Both [Lucy and Miss Bartlett] are too bound by the conventions of their class, by the conventions governing the behaviour of a lady, to give themselves fearlessly to life. Repressing a need for love and spiritual freedom, both women inevitably become hypocrites." (p. 97)

20 Lionel Trilling, *E. M. Forster* (New York: A New Directions Paperbook, 1964), p. 108.

21 Norman Kelvin, *E. M. Forster* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1967), p. 96.

22 Alan Wilde, p. 47.

23 Alan Wilde, p. 48.